

こころの玉手箱

拓殖大学学長

渡辺 利夫

夕刊文化



山梨県の甲府。当時、人口8万人の山国の小さな街が、米軍の激しい空襲を受けた。1945年(昭和20年)7月6日の深夜、139機のB29が飛来、970人の焼夷弾が降り注いで市街地を壊滅させた。燃え盛る火の中を家族ともども逃げ惑い、生き延びて郊外の母の里にたどり着いた。気がつけば上半身にいくつも火傷を負っていた。右手の付け根のぐるりの火傷の痕は、寒い冬の日には今でもつづいてあの恐怖を呼び戻す。

母の生家で小学生の時期を過ごした。父は商売で旧満州(現中国東北部)に出かけていた。田舎の学校で私は異分子だったらしい。

父が帰還し、商売も軌道に乗れ、家族は甲府に新し

甲府での少年時代

モームを原書で、夢は小説家



実家は印鑑製造販売業で、父や兄が彫ってくれた

の役が私に回ってき た。父方であれ母方であれ、血族の中に入っ た者など当時は誰もいなか った。荷の 重いこと

はあつたが、父の意に副わ ないわけにはいかない。 山梨英和学院に通って いた姉がテキストに使って いたサマセット・モームの『人 間の絆』を私にくれた。初 めて手にする英語の本であ る。こいつを読み込んでや ろうと決意し、辞書が黒ず んでくるほどに引きつづけ て読み進むものの、内容が まるで伝わってこない。

しかし、数カ月の悪戦苦 闘の末に、まったく突如と してモームの文章が豊かな 意味連関をもって頭の中 に すーっと入ってくるではな いか。勉強とはこういうこ となのかと思わされた初め ての経験であった。モーム の原書を東京の丸善から取 り寄せては読み、読んでは 取り寄せていっばしの文学 少年であった。小説家にな りたいと痛切に思った。

わたなべ・としお 1939年山梨県生まれ。慶応義塾大 学経済学部卒。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授を 経て、拓殖大学国際開発学部学部長。現在、同大学学長。第 17期日本学術会議会員。アジア政経学会元理事長。吉野作造 賞など。

く建てられた家に移った。 父の商売は印鑑の製造販売 業。山梨県の山には木質の 緻密なツゲが豊富に自生し ており、これを印材とした ハンコ製造が当時の山梨の 地場産業であった。印材の 面に細い筆で字体を逆さま に書き込み、字体通りに象

刻していくという、細密な 技能を要する作業である。 父の腕は相当のものだとい われ、何人かの下請けの職 人を抱えていた。

金銭に多少のゆとりを得 た父は、5人の子供のうち 1人くらいは名のある大学 に進学させたいと考え、そ

とき昔 下がりにはいかない。 ンチが 気づん 右のゼ け、ト こと。 が鳴く 「オン 隣の まりし うと臨 自分で で、奥 「こい のが、 おまき っ赤い た。小 さくな を見上 也は偉